吉祥果

円頓寺だより

令和５年
３月号
【吉祥果 389 号】

春のお彼岸を迎えます。日本政府はゴールデンウィーク明けにはコロナ感染症をインフルエンザ並みの五類に分類する意向のようです。少しずつでも日常生活が戻ってくるといいですね。

今年の春のお彼岸法要につきましても、感染対策を取りながら一部制で開催したいと考えております【四頁参照】。ご協力をお願いいたします。

さて日経新聞の夕刊に面白い記事がありました。**Aちゃんは、いたずらをしてコップを一個割ってしまった。Bちゃんは、ママのお手伝いをしようと思ったが、うまくできずコップを十個割ってしまった。さて、AちゃんとBちゃんどっちが悪いでしょうか？という質問を幼い子供にすると、どう答えるのか。**

これは東北大学の長谷川真理先生の研究に基づくものです。先生は**「他者を思いやる寛容性は九歳ころから身につくから、小学校低学年までは割った数が判断基準になり、年齢が上がるとともにその背景、つまり相手の気持ちを汲み取ったうえでの判断ができるようになるのだ」**といっています。

「ということは思いやりや優しさは後天的に備わるものということなんだなあ。そんなものなのか？」と不思議に思って、お寺にお参りに来た子供に先の質問を投げかけてみました。

すると驚いたことに、来年小学校入学の女の子は「Bちゃん」と即答し、現在一年生の女の子は三分くらい考えて「Bちゃん、かなぁ」と答えました。しかし彼女の兄で四年生の男の子はまっすぐ私の方を見て「Aちゃん。ワザとはいけないと思うよ。Bちゃんはたくさん壊したけれど、お手伝いしようとしていたんだから」としっかりした口調で答えました。「ほう、新聞の記事通りじゃないか！」と結果の一致に驚きました。四年生の彼は一か月前に十歳になったばかり。成績も優秀で、学校での人望も厚いと聞いています。答えてくれた二人の女の子も優しくて優秀な子供さんです。一年生の女の子と四年生の男の子は兄妹で、家庭環境は同じはずだから、人を思いやる心は九歳ころから発達するという記事の信ぴょう性は高そうです。

記事の中で先生は**「子供は学校からいろいろな思いを持ち帰って来る。子供が学校生活での出来事を話した時、子供に寄り添うことが大事で、相手の視点に立った考えを提示して、一緒に考えるようにすると、子供に思いやりの心が育つ」**と言っています。そして**「優しい人の周りに**

はたくさんの友達が寄ってくるし、あらゆる面で良い環境が整う。だから子供にはたくさんの寄り添った声掛けをしてほしい」と結んでいます。

私も教誨師という役柄、犯罪者や未決の収容者と面会し、話を聞く機会があります。時に彼らは自分に犯罪行為をさせたのは被害者が悪いからだと、被害者のせいにします。そういう場合には彼らに「あなたの考えは間違っている」とはっきり伝えます。彼らは事の善悪を教えられていないと考えるからです。

最近、回転すし店でいたずらしている動画を投稿している人や、闇サイトで集まった初対面の数人が一緒になって強盗をしたとか…、お年寄りを狙った振込詐欺もそうです。インターネットを悪用した、はた迷惑な事件が続いています。彼らのように他人の迷惑を考えない問題行動を起こす人たちは、小学生の頃に学ぶべき思いやりの感情が芽生えず、大人になったのでしょうか？本人の性格の問題なのか？子供のころの家庭環境の問題なのか？理由はわかりませんが、彼らに他人を思いやる心が欠如していることは想像できます。

彼らは、自分の行動によって、この先はどうなるかを想像できないのでしょうか？彼らは、被害者の心情も、自身の家族の今後の姿も想像できないのでしょう。では相手のことを思って行動できるようになるにはどうすればいいのでしょう？

まずは相手が何歳であろうとも、親が子供に寄り添うように接することです。まさにこれこそ仏様の慈悲の姿です。

お釈迦様は法華経の譬喩品（欲令衆）で、**「この世の人々はみな我が子だから、苦難が降りかかって困っていたら親として必ず助け出して守ってあげますよ」**とおっしゃっています。お釈迦様が見捨てず寄り添ってくれています。私たちもお釈迦様にならって、困っている人は我が子だと思って、寄り添うようにしなければなりませんね。それが良い社会への近道だと思います。みんなそんな思いで生きていけることができる世界が仏国土、仏様の国である浄土です。そんな気遣いのできる社会になることを仏様は願っておいでしょう。

もう春です。進級、進学、就職など、新しいことがたくさん待っている春です。新しい世界で道に迷っているに優しく寄り添える人になりたいですね。

〈蒙古の使者来る〉三十一

文永五年の正月十八日、蒙古(元)の使者が書状をもって鎌倉を訪れました。あわてたのは時の幕府。書状には友好関係を結ぶためといいながら、蒙古の支配下に置こうという意図であり、もしそむけば武力をもって従わせるという脅迫状。当時の蒙古はわずか半世紀の間にユーラシア大陸の四十の国を滅ぼし、数百万人の命を奪った大帝国で、朝鮮半島の高麗国も属国になっていました。

ところが鎌倉幕府も京の公家衆も会議を重ねますが結論は出ません。とうとう使者に何も返書ももたせず返してしまいました。

日蓮聖人はこの五年前に著述し幕府に送った『立正安国論』に、外国よりの侵略を予言し、それが合致したのです。この予言が的中しているのですから、幕府より何かの相談があってもよさそうなものですが、何の沙汰もありません。もとより諸難の原因は正法たる法華経を捨て邪教たる諸宗を信仰するからであると結論付けられていますので、沙汰がないのも理解できます。

そこで日蓮聖人は十一通のお手紙をしたため、幕府の北条時宗、平頼綱、北条弥源太、宿屋光則等の為政者、建長寺の道隆、極楽寺の良観、大仏殿の隆観、浄光明寺の行敏、寿福寺、多宝寺、長楽寺といった有力寺院に送りました。その内容は《先年上呈いたした『立正安国論』の如くに符合した今、諸宗集めて、仏法の邪正をはっきりさせていただきたい》というもの。そしてこれら十一通の手紙を出したからにはただではすむまいとのご覚悟であったようです。

檀信徒にあてた手紙には

「書状を送ったからには、幕府も有力寺院も黙ってはいないことでしょう。きっと日蓮はじめ、弟子檀信徒には流罪、死罪の命が下ることは明白です。少しも驚くべきことではありません。日蓮はそのような命が下っても意見を取り下げたり、曲げたりはしないし、覚悟もできております。なぜなら仏様のご遺志は日蓮の『立正安国論』と同じなのですから。仏様のご遺志のためなら命なぞ惜しくはありません」と述べられています。

ところが十一通のお手紙はどこでどうなったのか、手にわたったのか、あえて無視されているのか、何も音沙汰がありません。ただ日蓮聖人への反感、憎悪はますますつのっていきました。

一方、幕府も朝廷も蒙古の使者に返事も渡さずに返したからには兵力をもって攻めてくる覚悟をしなければなりません。朝廷は諸宗寺院、諸社に祈祷を申しつけ、幕府は西国に兵を集めました。翌年には蒙古の使者が対馬にきて島民二人を連れ去りました。

日蓮聖人は富士山に登り、かねて書写した法華経を山腹に埋めて天下泰平をご祈願なさいました。以来この地が「経が岳」と呼ばれるようになりました。